

自律性を育むクッキング活動

○浅田佑子 氏林美陽子 井上啓子 弓場恵子 平野 愛 (東豊中幼稚園)
橋本祐子 (関西学院大学)

学校法人春緒野学園 東豊中幼稚園（以下、本園）では子どもの自律性を育む取り組みの一つとしてクッキング活動を行っている。3歳児、4歳児、5歳児各クラスの育ちをとらえ、それぞれに合ったねらいを考え、3年間の経験の連続性がもてるよう環境や内容を改良してきた。本発表では、「白玉団子づくり」を中心に、現在のクッキング活動の取り組みについて理論と実践の両側面から報告した。

【教育方針の3つの柱】

本園では、①「自分で考えて決める力」、②「思いやりをもって人と関わる力」、③「自分を大切に思う心」を育てることを柱に保育を行っている（図1）。

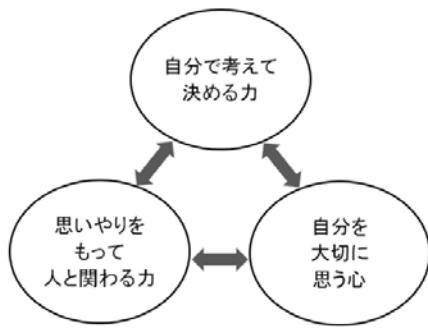


図1 教育方針の3つの柱

【クッキング活動を通して】

本園では複数のメニューを取り入れてクッキング活動を行っており、それぞれの活動における子どものいくつもの学びを捉えているが、特に、以下の3つの知識を子ども自身が構成することを重視している。

- ★ **物理的知識**：材料同士を混ぜると柔らかくなる、焼くと膨らんだり、固くなったりするなど、科学的知識の基礎となる物の変化に気付く。
- ★ **論理・数学的知識**：比べる、数について考える、量（多い・少ない）や時間（早い・遅い）を考えるなどの関係づけをする。
- ★ **社会的知識**：材料や用具の名前、用具の扱い方などについて知る。

本園のクッキング活動は、子どもが楽しむことはもちろんだが、それだけでなく、子どもたちが自分で考えて自分たちで目標を達成する力、つまり自律性を育てることを目的としている。そのため、できるだけ保育者に頼らず、友だちと協力する態度を身につけ、話し合いができるように3~4人の小グループによる活動をしている。

【クッキングブック活動の概要】

今回の発表では、本園でのクッキング活動における次の点について詳細に報告した。

- ★ 子どもが自分たちで判断して活動が進められるよう取り入れているクッキングブックの特徴および作成上の留意点
- ★ 年齢や発達、経験に応じたクッキング活動の計画と実践
- ★ クッキングブックと読みの教育について
- ★ 3歳児、4歳児、5歳児の各クラスにおける「白玉団子づくり」のねらいと内容、および3年間の経験の連続性について
- ★ クッキング活動のための環境構成について
- ★ クッキング活動への導入について（衛生面への配慮も含む）



【クッキング活動のビデオ観察より】

今回の発表では、以下に挙げるいくつかの場面のビデオ映像を紹介し、子どもの姿やその変化、保育者の援助、本活動の意義など、本実践における重要なポイントについて報告した（すべて5歳児クラスの映像）。

1. **材料の入れ方を調節する場面**：初めはべたべたな状態に水を入れたり、反対にぱさぱさな時に粉を入れたりする姿から、適量の水をそのまま全て入れる姿へ、さらには必要だと思う量の水を調節しながら入れる姿へと変化する様子が見られた。
2. **材料を混ぜてこねる場面①**：粉の質の変化に気付いたり、子ども同士で必要なものを判断したりする姿が見られた。また3歳児でクッキング始めた頃は、わからないことがあるとすぐに保育者を呼ぶ姿があったが、経験を重ね、5歳児ではうまくいかない



からなることがあるとすぐに保育者を呼ぶ姿があったが、経験を重ね、5歳児ではうまくいかない

- ときもグループの友だちとどうすればよいかを考え、すぐに保育者に頼らず協力する姿が見られるようになった。
3. **材料を混せてこねる場面②**: 保育者は直接どうすればよいかを教えるのではなく、子どもがほかのグループの様子を見て、さらに自分たちで考えられるような言葉をかけ、援助している。
 4. **団子を鍋に入れる場面**: 初めは団子が浮いてくることが面白く、喜ぶ姿だけが見られたが、次第に団子の大きさと浮いてくる時間との関係づけや、数の意識などが見られるようになった。
 5. **できた団子を分ける場面①**: 3歳児から自分たちで団子を分ける工程を入れているが、初めから上手く分け合うことはできず、量の違いでトラブルになることもよくある。しかし、日々の保育やクッキングでの経験を重ね、できるだけ公平に分けようとする姿や、自分の器だけではなく、友だちの器にも目を向け、団子を入れてあげる姿が見られるようになった。
 6. **できた団子を分ける場面②**: 粉と水を交互にどんどんと入れているうちに、沢山の生地ができたグループでは、食べ切れずに余った団子をほかのグループに分けてあげる姿が見られた。その時にも自分で決めるのではなく、同じグループの友だちに相談し、確認する姿が見られた。
 7. **できあがった団子をみんなで食べる場面**: 3歳児、4歳児、5歳児と共に満足そうな表情と自分たちの力で作ったという自信が見られる。みんなで考え、力を合わせて作ったものだからこそ、より一層おいしく感じられるのだろう。



4歳児、5歳児と共に満足そうな表情と自分たちの力で作ったという自信が見られる。みんなで考え、力を合わせて作った

ものだからこそ、より一層おいしく感じられるのだろう。

これまでの実践と以上のような観察から、本活動には次のような意義があることがいえる。

- ★ 白玉団子づくりは、物の変化がとらえやすく、子どもが自ら考え、関係づけをするという点でよいメニューであるといえる。
- ★ どの年齢の子どもにとっても、友だちと一緒においしいものを作り食べることは、それ自体が楽しいことである。本活動は、それだけでなく、グループの友だちと相談しながら、どうすればうまくいくのかを考え、協力して作ることを心から楽しみながら取り組むことのできる活動でもある。

- ★ 5歳児クラスでは、数人の子どもが率先して意見を出すグループや、慎重に団子づくりを進めるグループなど、様々な子どもの姿が見られた。しかし、どのグループもおいしい団子を作りたいという一つの目標に向かって繰り返し取り組むことを通して、お互いの意見を出し合ったり、自分の



ことだけでなく相手のことも考えたりする姿が見られるようになった。本活動のように小グループで行うクッキング活動は、友だちと協力する力を育てる上で重要な経験になる。

【自律性を育てるための保育者の援助】

自律性を育むという目的のために、以下の点を中心とした援助と取り組みを行っている。

1. 正しい方法を教えたりせず、クッキングブックを頼りにして、自分たちでどうすればよいかを考えるように励ます。
2. うまくいかない経験を大切にする。
3. グループの友だちの様子や思いに子ども同士で気付けるように適度な言葉かけをする。
4. できあがった団子の取り分ける作業も子どもたちで行えるよう促す。
5. クッキング後には、クッキングを通して気付いたことや思ったことを発表する振り返りの時間を設ける。
6. クッキング活動をビデオに記録し、見直すことによりよい援助を考える。

今回の発表において実践を振り返り、様々な意見や感想をいただくことで、さらに子どもが自ら考え、協力できるクッキング活動にするために、改善を重ねていきたいと考える。

【参考文献】

- C. カミイ&加藤 (2008) 「ピアジェの構成論と幼児教育 I : 物と関わる遊びをとおして」 大学教育出版
DeVries, R., Zan, B., Hildebrandt, C., Edmiston, R., & Sales, C. (Eds.) (2002) *Developing constructivist early*

childhood curriculum: Practical principles and activities.

New York: Teachers College Press.